

# 心がざわつくときこそ 声に出して読みたい、 ちいさなおばあさんの物語。

志茂田景樹さん

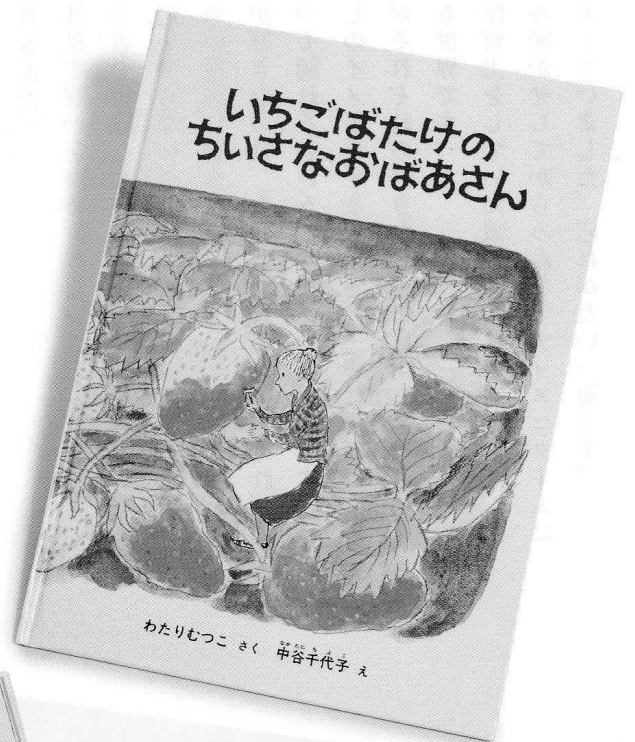
作家。1940年生まれ。『黄色い牙』で直木賞受賞。全国で絵本の読み聞かせ活動を続ける。

先日、ホタルイカの黒作りを賞味しました。そのとき、深海に棲むダイオウイカが脳裏をよぎりました。成長すると18メートルにもなるそうです。

イカは大小の種類が豊富なのに、人類は大小で言えば、単一種（類？）じゃないですか。でも、気の遠くなるほどの大昔に、ホタルイカのような小人たちが存在していたんだよ、不運にも生存競争に敗れて消えていったけれどね、と子供のように思うことがたまにあります。

彼らは一寸法師や親指トムのように、ファンタジーの世界に命脈をつないで、現代に生きる私たちに何かを訴えているのではないか。

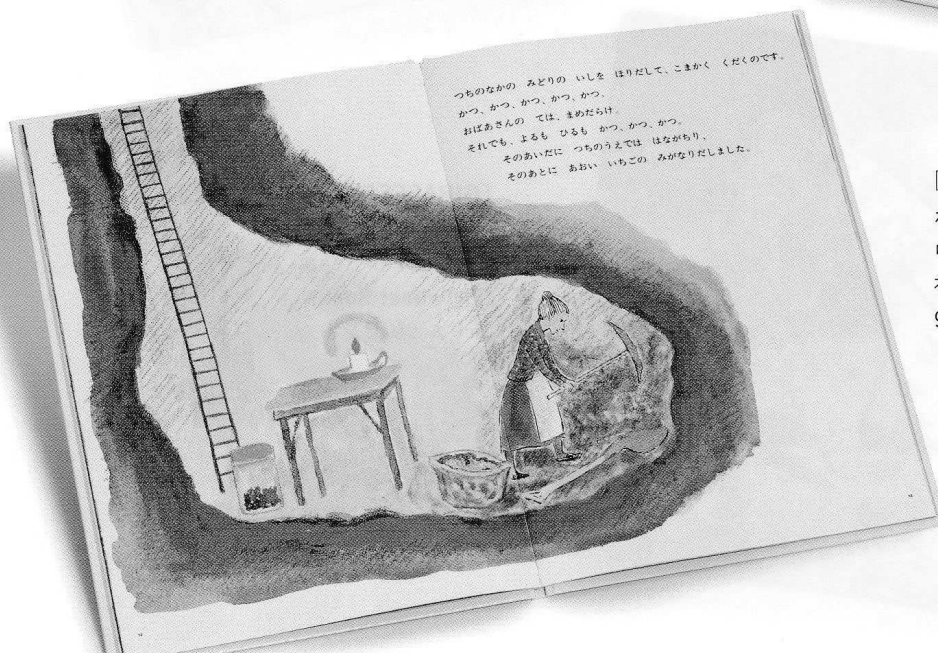
一寸法師の絵本の読み聞かせをしているときに、そんな思いが浮かんだこともありました。初めてこの絵本を読んだときに、その答えをもらった気になって、とても嬉しかったですね。



小人たちは滅んだのではない、いちごの実を赤く染めるといふ自分たちの新しい役割を土の中に見出して、あえて私たちの先祖の前から姿を消していったに違いないのです。

地球は地の球と書きますね。この星でいのちあるものはすべて大地の恵みを受けて生を謳歌しています。人類以外のいのちもあるものたちは本能の営みによつて享受していますが、豊かな知性を持つ人類はときにそれをマイナスに働かせて大地を汚す挙に出ることがあります。それは恩を仇で返すことではないでしょうか。

私たちは大地の恵みによつて、地上に平和の傘を広げて安心して暮らすことができるのです。心が安らぎを求めているときは、どうかこの絵本を声に出して読んでください。



『いちごばたけのちいさなおばあさん』  
わたりむつこ 作  
中谷千代子 絵  
福音館書店  
900円+税